

英語借用語の発音

小林 泰 秀

A Pronunciation of English Loanwords in the Japanese Language

Yasuhide KOBAYASHI

1. 序

本稿は、英語が日本語に外来語として取り入れられる際に、どのような規則が働いているかを述べるものである。借用される言語の規則が外来語に反映されているのか、借用する言語の規則がそのまま外来語に適用されているのか、あるいは両言語の接触によって独自の規則が現れているのかをみてゆく。本稿で問題とする点は、英語の母音と子音が日本語の母音と子音に置き換えられる際の規則は何か、子音挿入と母音挿入はどちらが先か、英語のスペリングと借用語の発音の類似性をどの程度重要視すべきか、英語に見られるアクセントと発音の関連が借用語ではどのように現われているのかなどである。日英両言語間の相違点、共通点に注目しながら議論を進めてゆく。

2. 促 音

英語の cup, net, kick を kappu 「カップ」, netto 「ネット」, kikku 「キック」のように、子音を挿入して促音に発音するのは、英語の CVC 音節を保持して英語らしく聞かせるためであろう。促音化規則は、一般

的には阻害音を重複するものであり、次のように書ける。Q は促音を表す。

(1) 子音挿入

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} _ [-\text{sonorant}]$$

(1)の規則は、短母音+阻害音の音節では子音を挿入するというものである。次の(2)の子音を付加した借用語はローマ字で書いているが、母音の挿入はまだなされていない。

(2) a. 無声破裂音

cap → kyapp, ketchup → kechapp, rocket → rokett,
violet → baiorett, picnic → piknikk, hammock →
hanmokk

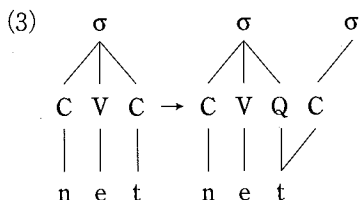
b. 有声破裂音

snob → snobb, pyramid → piramidd, liquid → rikidd,
drug → dragg, bulldog → burdogg

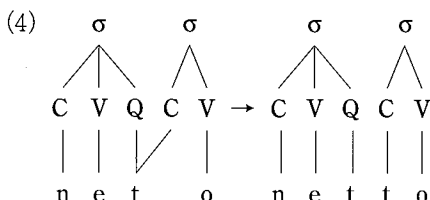
c. 破擦音

touch → tacch, judge → jajj

(1)の規則は子音を自律分節的に次の音節に広めるというものであり、次のように書ける。σ は音節を表す。



(3) の頭子音を持つ音節には更に母音が挿入される。



(3)と(4)の樹状図から、借用語の促音化は英語の音節構造を保持したものであることが分かる。日本語の音節構造で発音するなら、net は netto よりは neto か ne:to, god は goddo よりは godo か go:do か gondoの方が妥当である。このことから、促音化は外来語にのみ適用される日本語の規則ということになる。

3. 母 音 挿 入

日本語の音節は、基本的には -CV- で成り立っているので、英語の1音節語の next [nekst] は ne.ku.su.to と4音節になる。そのためには母音を挿入しなければならない。日本語には「ア、イ、ウ、エ、オ」の五つの母音があるのだが、どの母音が一番英語に近く聞こえるのだろうか。cup, net, kick, cab, head, dog の語尾に母音を挿入するとしたら、「ウ」が最も妥当であるように思われる。/kʌpu/, /netu/, /kɪku/, /kæbu/, /dɒgu/の方が、非高母音の「エ、オ、ア」を挿入する /kʌpe/, /kʌpo/, /kʌpa/ よりも英語に近く響く。日本語の「ウ」は英語よりも中舌の位置に近い母音 /u/ であり、日本語の話者にとっては同じ高母音の「イ」よりも舌を移動せずに発音できる母音であるので、挿入しやすいと言える。

城生 (1998: 67-68) によると、「ウ」は舌の位置は中舌寄りの後舌であり、開口度は狭と半狭の間にある。そして開口部は縦方向の開きと

横方向の開きの最も少ない母音である。城生 (66) は更に、「ウ」はしまりのない中途半端な口の形をしているので、人物写真を撮る際には「チーズ」と言うのは良くないと進言している。このことから、日本語の「ウ」は舌の移動、唇の変化が少なく、五つの母音の中では最も中立的であると言える。

外来語に挿入される母音には、「ウ」の他に「イ」と「オ」がある。なぜこれらの母音が選択されるのかみてみよう。

3.1. 「イ」の挿入

「イ」は church /tʃɜrtʃ/ 「チャーチ」、judge /dʒʌdʒ/ 「ジャッジ」のように硬口蓋破擦音の /tʃ/, /dʒ/ の後に挿入される。「ウ」を挿入せずに「イ」を挿入するのは、/tʃ/, /dʒ/ と同じ調音点の硬口蓋母音の「イ」を挿入する方が、軟口蓋寄りの「ウ」よりも調音上自然なためである。それではなぜ bush /buʃ/ 「ブッシュ」、mirage /məɾɑ:ʒ/ 「ミラージュ」が「ブッシ」、「ミラージュ」と発音されないのかが問題となる。筆者には「チャーチ」、「ジャッジ」と同様に、「ブッシ」、「ミラージュ」の発音の方が自然であるように思われるが、「ウ」を挿入する理由は次のようになる。

英語の発音ではあるが、/tʃ/, /dʒ/ と /ʃ/, /ʒ/ は共に硬口蓋音で摩擦を伴うが、前者は非継続音であり、後者は継続音である。/tʃ/, /dʒ/ では前舌面が硬口蓋に接触するので、「ウ」よりも「イ」が発音しやすい。一方、/ʃ/, /ʒ/ の方は前舌面が硬口蓋に触れないので、調音しやすい中舌母音の「ウ」に舌の位置が移動したと考えられる。日本語では「ジャッジ」の「ジ」も「ミラージュ」の「ジ」も共に破擦音であるが、「ジ」と「ジュ」の区別は英語の発音の違いによるものと考えられる。

「イ」の挿入規則は次のように書けるであろう。

(5) 「イ」挿入規則

$$\phi \rightarrow i / \left[\begin{array}{l} +\text{palatal} \\ -\text{continuant} \\ +\text{strident} \end{array} \right] \text{—————}$$

促音化規則と「イ」挿入規則は次のように適用される。

- (6) catch → kyacch → kyacchi 「キャッチ」
 match → macch → macchi 「マッチ」
 college → karejj → karejji 「カレッジ」
 village → birejj → birejji 「ビレッジ」
 lodge → rojj → rojji 「ロッジ」

3.2. 「オ」の挿入

「ウ」が最も挿入しやすい母音であるが、硬口蓋破擦音の次には調音点の同じ「イ」が挿入されることを述べた。次の問題は、なぜ hit, bed のように歯茎破裂音 /t, d/ の次に非高母音の「オ」が選択されるかである。理由は母音の付加によって /t, d/ の音質を変えないためであろう。hit に「ウ」や「イ」を加えると, hittsu, hicchi と発音され /t/ が /ts/, /tʃ/ に変化してしまう。英語の /t/ の発音を維持するため「オ」を選択したと思われる。「エ」や「ア」ではなく「オ」が選択されたのは、これらの音の中で「オ」が最も舌や唇の変化を伴わずに調音できるからである。(城生, 1998: 67 参照)

挿入母音の選択としては「ウ」が第一候補であるため、/t/ に「ウ」を付加し、/tsu/ 「ツ」と発音する借用語も次のようにいくつかある。

- (7) a. sport 「スポーツ」, shirt 「シャツ」, sheet 「シート」,
 bucket 「バケツ」, jacket 「ジャケツ」, tree 「ツリー」

b. twin 「ツイン」, twist 「ツイスト」, two 「ツー」

(7a)のように「ツ」と発音する語は比較的古い時期に借用されたものである。bucket「バケツ」、jacket「ジャケツ」と発音する語も後にできたが、意味が異なっている。tree「ツリー」では /t/ が /r/ の前で「ツ」に発音されているが、これは例外的であり、trick「トリック」、triple「トリプル」、street「ストリート」のように「ト」に発音されるのが一般的である。(7b)の「ツ」の発音は、/tw/ が「ツ」と発音されたものである。/w/ と /u/ が共に〔後舌性、高性〕の素性を持つことから、/tw/ が「ツ」と発音される。twin に母音挿入があれば、twilight が「トワイライト」と発音されるように、「トイン」と発音されるはずである。

「オ」挿入規則は次のようになる。

(8) 「オ」挿入規則

$$\phi \rightarrow o / \left[\begin{array}{l} +\text{alveolar} \\ +\text{plosive} \end{array} \right] \text{———}$$

(9) rocket → rokett → roketto 「ロケット」

trumpet → tranpett → toranpetto 「トランペット」

try → torai 「トライ」

pyramid → piramidd → piramiddo 「ピラミッド」

dry → dorai 「ドライ」

3.3. 「ウ」の挿入

硬口蓋破擦音 /tʃ, dʒ/ と歯茎破裂音 /t, d/ 以外の子音の後には、一般的に「ウ」が挿入される。

(10) 「ウ」挿入

mix → miks → mikkusu 「ミックス」
 picnic → piknikk → pikunikku 「ピクニック」
 staff → staff → sutaffu 「スタッフ」
 socks → sokks → sokkusu 「ソックス」
 cap → kyapp → kyappu 「キャップ」
 ham → hamu 「ハム」
 cocktail → kakuteru 「カクテル」
 song → songu 「ソング」
 taxi → takushii 「タクシー」
 rib → ribu 「リブ」

(10)の例では /k/ の次に /u/ が挿入されて「ク」に発音されているが、/k/ の次に /i/ が挿入されて「キ」に発音される語もある。これは古い発音であるが、/k/ の前の母音が前舌母音 /i, e/ なので母音調和が起きているのであろう。

(11) 「キ」の発音

deck → dekk → dekki 「デッキ」
 exite → ekisaito 「エキサイト」
 text → tekisuto 「テキスト」
 Texas → tekisasu 「テキサス」
 mixer → mikisaa 「ミキサー」
 ink → inki 「インキ (インク)」
 next → nekisuto 「ネクスト (ネクスト)」

英語の pen, hanger は「ペン」, 「ハンガー」と発音され、/n/ の後ろには母音が挿入されない。所が ham, teammate は「ハム」, 「チームメイト」のように /m/ の後ろに /u/ が付加されて「ム」に発音される。/u/

が挿入されるのはどのような場合かみてみよう。

<n>に綴られる鼻子音の後には母音が付加されない。<n>は英語では次の子音に同化して /n/, /m/, /ŋ/, /ŋ/ に発音されるが、外来語では常に「ン」に綴られる。

- (12) sun /sʌn/ → san 「サン」
 penfriend /pɛmfrend/ → penfurendo 「ペンフレンド」
 sunburn /sʌmbɜ:n/ → sanbaan 「サンバーン」
 sunset /sʌnsɛt/ → sansetto 「サンセット」
 Sunday /sʌndeɪ/ → sandei 「サンデー」
 manpower /mænpaʊər/ → manpawaa 「マンパワー」
 English /ɪŋɡlɪʃ/ → ingurisshu 「イングリッシュ」
 drink /drɪŋk/ → dorinku 「ドリンク」
 king /kɪŋ/ → kingu 「キング」
 song /sɒŋ/ → songu 「ソング」
 king-size /kɪŋsaɪz/ → kingusaizu 「キングサイズ」

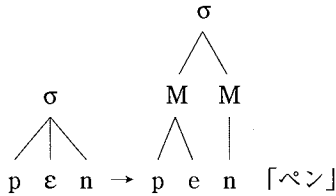
king 「キング」, song 「ソング」は英語の抽象的な基底表示である /king/, /sɒŋ/ に /u/ が加えられたと考えられるが、英語のスペリングに /u/ が加えられたと見る方が理解しやすい。

英語のスペリングが <n> ではなく <m> であるにもかかわらず、<m> の次に子音がある場合には、次のように尾子音の /m/ には /u/ が挿入されずに「ン」と綴られる。

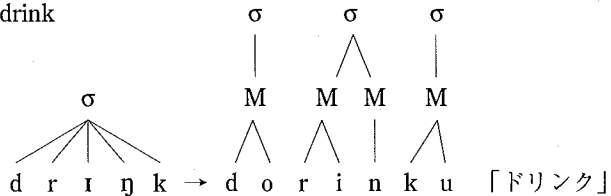
- (13) camp /kæmp/ → kyanpu 「キャンプ」
 hamburger /hæmbɜ:rgər/ → hanbaagu 「ハンバーグ」
 symbol /sɪmbəl/ → shinboru 「シンボル」
 umpire /ʌmpaɪər/ → anpaia 「アンパイア」

(12)と(13)の借用語の鼻子音「ン」は、それ自体で一つのモーラを形成する発音である。M はモーラを表す。

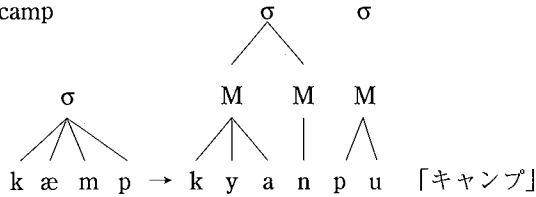
(14) a. pen



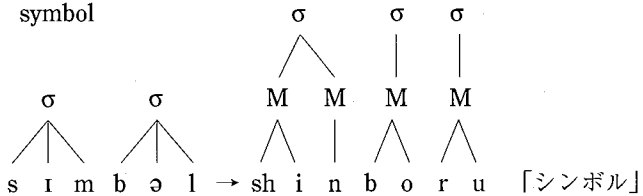
b. drink



c. camp



d. symbol



/m/ の後ろに子音があるにもかかわらず、/u/ の挿入される場合がある。/u/ の挿入される借用語を見てみよう。

(15) a. cream /kri:m/ → kuriimu 「クリーム」

room /ru:m/ → ruumu 「ルーム」

column /kʌləm/ → koramu 「コラム」

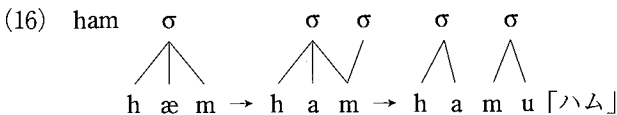
b. roommate /ru:mmeɪt/ → ruumumeito 「ルームメイト」

columnist /kʌləmnɪst/ → koramunisuto 「コラムニスト」

teamwork /ti:mwɜrk/ → chiimuwaaku 「チームワーク」

(13) と (15b) の英語は、共に /m/ が音節の尾子音にある。両者の違いは、(13) の語は二音節であっても一つの形態素であるが、(15b) の語は二つの形態素から成り立っていることにある。従って (15a, b) のように語末あるいは形態素末の /m/ は外来語の撥音にはならない。一方、(12) と (13) の鼻子音を撥音と見なすのは、その基底表示が日本語のように /n/ であると考えられるからである。日本語では、/kempoo/ 「憲法」、/kambun/ 「漢文」の発音では /n/ が次の子音への同化によって /m/ になるが、外来語の camp, symbol の /m/ の発音も同様の現象と見なしているのである。ham や team のような語末の /m/ は、その基底の音素が /n/ であるとは考えられないので、/u/ を付加して別のモーラを形成することになる。

ham の /m/ は、hamu 「ハム」では音節の頭子音になる。次の樹状図のように /m/ は促音にはならないので、前の音節から切り離される。



(16) の例と (3), (4) の例から、母音挿入は子音挿入の後に適用されると言える。というのは、頭子音があるから母音が必然的に挿入されるのであり、その逆はありえない。また、CVC を CVC.CV の音節にするのは外国語の音節形態を維持するものであり、母音を挿入した後の CVC.V に頭子音を付加するのは不自然である。母音を挿入した後の CVC.V は「ハム」のように CV.CV の音節になるべきである。

4. 音声への対応

借用語の母音の発音は、英語の発音に準じるものとスペリングに準じるものがある。まず英語の発音との関係を見てみよう。英語の母音の発音に対する借用語の発音を図で示すと次のようになる。なお、英語の二重母音は前の音声の位置に書いている。

(17) 母音の対応

	前舌	中舌	後舌
高	i: イー ɪ イ		u: ウー ʊ ウ
中	eɪ エー ɛ エ	ɜr/ər アー ʌ ア	oʊ/o: オー ɔɪ オイ ɔ オ
低	æ ア	aɪ アイ aʊ アウ	ɑ: アー ɑ ア

(17) の表により、前舌高母音は「イ」、前舌中母音は「エ」、後舌高母音は「ウ」、後舌中母音は「オ」であり、他の中母音と低母音は「ア」と発音される。(17) の表に示されている英語の発音と借用語の発音の関係は、次のようである。下線部はそれぞれの対応する発音を示している。

- (18) a. /i:/ 「イー」: key /ki:/ → キー, entry /ɛntri:/ → エントリー
 b. /ɪ/ 「イ」: picnic /pɪknɪk/ → ピクニック,
 liquid /lɪkwɪd/ → リキッド
 c. /eɪ/ 「エー」: date /deɪt/ → デート,

May Day /meɪ deɪ / → メーデー

d. /ɛ/ 「エ」: net /nɛt/ → ネット, pen /pɛn/ → ペン

e. /u:/ 「ウー」: room /ru:m/ → ルーム,
cool /ku:l/ → クール

f. /ʊ/ 「ウ」: book /bʊk/ → ブック, look /lʊk/ → ルック

g. /oʊ/ 「オー」: echo /ɛkoʊ/ → エコー,
boat /boʊt/ → ボート

h. /ɔɪ/ 「オイ」: oil /ɔɪl/ → オイル, troy /trɔɪ/ → トロイ

i. /ɔ:/ 「オー」: water /wɔ:tər/ → ウォーター,
automatic /ɔ:təmətɪk/ → オートマチック

j. /æ/ 「ア」: ham /hæm/ → ハム,
sandbag /sændbæg/ → サンドバッグ

k. /ɜr/ 「アー」: bird /bɜrd/ → バード,
curtain /kɜrtən/ → カーテン

l. /ər/ 「アー」: hour /aʊər/ → アワー,
doctor /dɒktər/ → ドクター

m. /ʌ/ 「ア」: number /nʌmbər/ → ナンバー,
Sunday /sʌndeɪ/ → サンデー

n. /aɪ/ 「アイ」: ice /aɪs/ → アイス, smile /smaɪl/ → スマイル

o. /aʊ/ 「アウ」: powder /paʊdər/ → パウダー,
house /haʊs/ → ハウス

p. /ɑ:/ 「アー」: half /hɑ:f/ → ハーフ,
scarf /skɑ:(r)f/ → スカーフ

英語の発音に自由変異があるために、借用語の発音が英語の発音によってではなく、スペリングによって決められると思われるものがある。次の <e> と <o> の発音を見てみよう。<> 中の文字は、スペリング、つまり文字素 (grapheme) あるいは書記素である。

(19) <e> と <o> の発音

- a. <e> 「エ」: economy /ɪkənəmi:/, /ɛkənəmi:/ → エコノミー
enjoy /ɪndʒɔɪ/, /ɛndʒɔɪ/ → エンジョイ
- b. <o> 「オ」: ockney /kəkni:/, /kɒkni:/ → コックニー
ospot /spɒt/, /spɒt/ → スポット
- c. <o> /ʌ/ 「オ」: onion /ʌnjən/ → オニオン
oponge /spʌndʒ/ → スポンジ
- d. <o> /ɑ/ 「ア」: ocktail /kɑkteɪl/ → カクテル

(19a) は <e> が /ɪ/ と /ɛ/ の自由変異をなしているが「エ」と発音され、(19b) は <o> が /ɑ/ と /ɔ/ の自由変異をなしているが「オ」と発音されている。これは一見スペリング発音によると思われる。確かに <e> と <o> はローマ字読みでは「エ」と「オ」に対応するが、本稿は、英語の発音との対応を第1に考える。それで説明の付かない借用語の発音に関しては、次のステップとしてスペリングとの対応を考えることにする。(19a) の借用語が「エ」と発音されるのは、英語の /ɛ/ に対応しているのであり、同じように (19b) の借用語の「オ」は、英語の /ɔ/ に対応しているのである。他の自由変異の発音は、借用語の対象になっていないと考える。cup /kʌp/ 「カップ」、young /jʌŋ/ 「ヤング」では /ʌ/ が「ア」と発音されるが、(19c) の語では /ʌ/ がスペリング読みの「オ」に発音されている。(19d) の「カクテル」は、cock が「コック」と発音されることから、本来ならば「コクテル」と発音されるはずであるが、英語の発音 /ɑ/ に対応した発音になっている。このように <o> は必ずしも「オ」に対応しないことから、英語のスペリングではなく発音によって借用語の発音が決められていると言える。

英語の音韻体系には flower /flaʊər/, player /pleɪər/ のように母音が三つ連続する語がある。一方、日本語は基本的には CV 言語であるため、flower 「フラワー」、hour /aʊər/ 「アワー」のように /ʊər/ を「ワー」と発音し、player 「プレーヤー」、dryer /draɪər/ 「ドライヤー」のように

スペリングに <y> がある語は「ヤー」と発音している。/ʊ/ を /w/ に替えることと、スペリング <y> を /j/ と発音することで母音の連続を避けている。player /pleɪər/ を「プレーヤー」と発音するのは /j/ 挿入のように思われるが、次の (22) の例のように、英語のスペリングに <y> のない語は「V ア」と発音されている。日本語は CV 音節が基本形であることから、「イア」よりは「イヤ」の方が言いやすいのであるが、「イア」の発音は英語の発音を保つためである。

借用語では二つの母音の連続が許されることから、次の <ia> のように母音の連続する英語は、借用語でも「イア」と発音され、「イヤ」とは発音されない。

(20) <ia> 「イア」

Arabia 「アラビア」, nostalgia 「ノスタルジア」, mania 「マニア」,
Ammonia 「アンモニア」, Asia 「アジア」

/ər/ を「アー」と発音する場合と「ア」と発音する場合があるが、これも母音の連続に関連がある。次の (21) は英語の /ər/ を「アー」と長母音に発音する語であるが、(22) は /ər/ を「ア」と短母音に発音する語である。両者の違いは /ər/ の前に子音があるか母音があるかによる。

(21) /Cər/ 「C アー」

announcer 「アナウンサー」, illustrator 「イラストレーター」,
escalator 「エスカレーター」, calendar 「カレンダー」,
character 「キャラクター」, goalkeeper 「ゴールキーパー」,
synthesizer 「シンセサイザー」, popular 「ポピュラー」,
manager 「マネジャー」, regular 「レギュラー」

(22) /Vər/ 「V ア」

amateur /æmətʃuər/ → アマチュア
barrier free /bəɪrɪə fri:/ → バリア フリー

career /kəˈrɪər/ → キャリア
 engineer /ˈɛndʒənɪər/ → エンジニア
 interior /ɪnˈtɪərɪər/ → インテリア
 junior /dʒuːnɪər/ → ジュニア
 umpire /ʌmpaɪər/ → アンパイア
 fire /faɪər/ → ファイア
 sapphire /sæfəɪər/ → サファイア
 floor /flɔər/ → フロア

(22) の career 「キャリア」は短母音「ア」に発音されるが、同じような発音の carrier /kæˈrɪər/ は「キャリアー」と長母音「アー」に発音される。これは carrier が carry 「運ぶ」と -er 「人」の二つの形態素から成り立っており、「キャッチャー」, 「オフィサー」, 「スキーヤー」のように、「アー」が「人」の意味を表しているためである。ちなみに「スキーヤー」は「スキーアー」では母音が続くため、/j/ を挿入して「ヤー」と発音したものである。これは「プレーヤー」, 「バイヤー」, 「デストロイヤー」などへの類推である。<yer> への類推がなければ, skier /skiːər/ は「スキアー」と発音されるはずである。

(22) の「アンパイア」, 「ファイア」, 「サファイア」は「アイア」と三つの母音が連続している。この母音連続を避けるため、次のように子音を挿入する語もある。

(23) /ɪər/

- a. 「イヤ」: tire /taɪər/ (→タイア) → タイヤ
 wire /waɪər/ (→ワイア) → ワイヤ
 diamond /daɪəmənd/ (→ダイヤモンド) → ダイヤ
 モンド
 earring /ɪərɪŋ/ (→イヤリング) → イヤリング
- b. 「イヤー」: hired /haɪərd/ car → ハイヤー

(23) の例では「アイア」の「イ」の次にわたり音の /j/ が挿入されている。外来語ではその例が少なく例外的であるが、/j/ 挿入は言語の一般的な現象である。我々も何気なく *career*, *fire*, *junior* を「キャリヤ」, 「ファイヤ」, 「ジュニヤ」と発音してしまうことがあるであろう。

5. スペリングへの対応

外来語の発音には、英語の音声には対応せずにスペリングに対応するものが多い。その最も顕著なものが強勢のないあいまい母音 /ə/ に対する母音である。(17) の表にあるように /ər/ は「アー」に発音されるが、それは /ə/ が /r/ の前にある場合であり、他の場合にはスペリングによって決められる。次の下線部はスペリングと借用語の発音との関係を示している。

(24) あいまい母音の発音

- a. <i> 「イ」: animal /ænəməɪ/ → アニマル
alibi /æləbaɪ/ → アリバイ
- b. <e> 「エ」: toilet /tɔɪlət/ → トイレット
siren /saɪrən/ → サイレン
- c. <u> 「ウ」: hurray /həreɪ/ → フレー
uranium /jʊərəɪniəm/ → ウラニウム
- d. <u> 「ア」: support /səpɔ:(r)t/ → サポート
focus /fəʊkəs/ → フォーカス
- e. <o> 「オ」: iron /aɪrən/ → アイロン
police /pəli:s/ → ポリス
- f. <a> 「ア」: drama /drəmə/ → ドラマ
alarm /əld:(r)m/ → アラーム

(24c) の <u> が「ウ」に発音されるのは、ローマ字発音を考えれば当然のことである。しかし、(24d) の <u> は同じくあいまい母音に発音され

ながら「ア」に発音されている。これは *supper* /sʌpər/ 「サパー」、*custom* /kʌstəm/ 「カスタム」のような語では <u> が「ア」と発音されるので、*support*, *focus* の <u> もそれと同じ発音とみなしているからである。これは /ʌ/ と /ə/ は調音が似ているからであり、英語の /ə/ を「ア」に発音している訳ではない。

借用語の発音が英語の発音に準じているのか、スペリングに準じているのかを述べてきたが、どちらにも対応する語も多くある。例えば *coin* /kɔɪn/ 「コイン」、*mat* /mæt/ 「マット」、*pick* /pɪk/ 「ピック」の借用語の発音は、スペリングと音声の両方に対応している。本稿では英語の音声への対応を第一に考察し、(17) の表からはずれる借用語の発音に関しては、スペリングあるいはその他の要因を考えることにする。

借用語の発音が、英語のスペリングに対応する他の例をみてみよう。英語は、<VCe> のスペリングでは母音が二重母音に発音される。例えば、*stove* /stouv/, *cake* /keɪk/ の /ou/, /ei/ の発音は、語のスペリングから予測できるものである。借用語では (17) の表にならって「ストーブ」、 「ケーキ」のように長母音に発音されている。所が、<VCe> が英語では短母音であるにもかかわらず、(25a), (25c) のように借用語で長母音になるものがある。

(25) <VCe> → [VC]

- a. <oCe> 「オーC」: *oven* /ʌvən/ → 「オーブン」,
glove /glʌv/ → 「グローブ」
- b. <aCe> 「エーC」: *gate* /geɪt/ → 「ゲート」
ace /eɪs/ → 「エース」
- c. <aCe> 「エーC」: *image* /ɪmɪdʒ/ → 「イメージ」,
sausage /sɔ:sɪdʒ/ → 「ソーセージ」

(25) の借用語の発音は、英語の二重母音発音規則を借用語に適用したものである。

<age> が「エージ」と長母音に発音されるのとは反対に、<ange> は「エンジ」と短母音に発音される。これは /eɪ/ の次に子音群 /ndʒ/ が続くためであり、二つ以上の子音の前は短母音であるという言語の一般性を反映したものである。

(26) <ange> 「エンジ」

- a. arrange /əreɪndʒ/ → アレンジ
- change /tʃeɪndʒ/ → チェンジ
- ranger /reɪndʒər/ → レンジャー
- b. orange /ɔrɪndʒ/ → オレンジ

(26b) の orange は、英語の発音は /ɪndʒ/ と短母音であるが、(26a) と同じく「エンジ」と発音されている。英語の発音はどうであれ <ange> は「エンジ」と発音される。

英語のスペリングは同じでありながら、アクセントがない母音を短母音にする場合がある。英語の <ai> は máil, táilor のように強勢がある場合は /eɪ/ と二重母音に発音され、cúrtain, móuntain のように強勢のない場合は /ə/ に発音される。<ai> の発音は次のようになる。

(27) <ai> の発音

- a. /eɪ/ 「エー」: máil /meɪl/ → メール
- táilor /teɪlər/ → テーラー
- b. /ə/ 「エ」: cúrtain /kɜrtən/ → カーテン
- móuntain /maʊntən/ → マウンテン
- c. /eɪ/ 「エ」: cócktáil /kɒkterl/ → カクテル
- d. /eɪ/ 「エイ」: èntertáiner /ɛntərteɪnər/ → エンターテイナー

(27b) の借用語の発音は、長母音「エ」の短縮形である。英語では /eɪ/ と /ə/ は全く異質の母音であるが、借用語では共に「エ」であり、

長母音か短母音かはアクセントがあるかどうかによって決められる。この場合のアクセントを借用語のアクセントとする。そのように考えると、(27c) の cocktail が /ei/ に発音されているにもかかわらず、「カクテル」と「カ」にアクセントがあるので、「カクテール」と発音されないのが説明つく。しかし、アクセントのない母音が短母音になるのは英語の規則である。借用語には元の言語の規則が入り込んで影響を及ぼすことがある。

6. 外来語のアクセント

6.1. 長母音と二重母音

外来語のアクセントは、語末から二番目の音節が重音節であればそこに付与され、語末から二番目の音節が軽音節であればその前の音節に付与される。これは、語末の音節を韻律外とし、後ろから二番目のモーラを含む音節にアクセント核が付与されるというものである。まず、語末から二番目の音節が、長母音と二重母音の例をみてみよう。

アクセント核は二つの母音の音節に付与されるのであるが、標準日本語ではピッチの滝は二つの母音間に置かれる。つまり、アクセント核は音節に付与されるが、実際の発音では前のモーラが高いピッチで発音される。

次のカタカナの上の横線 ― は高いピッチを表し、┐はその次の音が低いピッチで発音されることを表している。更に、アクセント核の付与された音節は、太い文字で表している。# は語境界を表す記号である。本稿でのデータは、主に『NHK 篇 日本語アクセント辞典』(1995) からのものである。

(28) \bar{V} -音節

イ $\bar{\text{コ}}$ ール, エス $\bar{\text{カ}}$ レーター, オ $\bar{\text{ペ}}$ レーター, コー $\bar{\text{ディ}}$ ネーター,
コン $\bar{\text{ク}}$ リート, ダ $\bar{\text{メ}}$ ージ, マ $\bar{\text{ッ}}$ シュルーム, パ $\bar{\text{ス}}$ ポート,
パ $\bar{\text{ラ}}$ シュート

(29) **VV** - 音節 #

オールマイティー, シンセサイザー, スカウト, スポットライト,
 ダイナマイト, ハイライト, パラダイス (パラダイスもあり),
 ハワイアン

(29) の「パラダイス」の発音は、英語のアクセントに従ったものであろう。

本稿でのアクセント規則は、語末からの音節数を見てアクセント核を付与するものであるが、語末からのモーラを数えて、アクセント核を付与するやり方もある。窪蘭 (1995: 20) は、外来語のアクセント規則について、「語末から三つ目のモーラを含む音節にアクセント核を付与する」と述べている。窪蘭のアクセント規則は、いちいち音節構造を説明する必要のない非常に簡潔なものである。それに対して本稿は、外来語の音節構造とアクセントの関係を、英語の音節構造と強勢規則との関係に関連づけて考えようとするために、音節構造の記述が必要になってくる。英語の強勢規則も語末からのモーラ数によって決めるものであれば、軽音節や重音節の記述は不必要になる。(28), (29) のように語末から2番目の音節にアクセント核の付与される語は、語末から三つ目、あるいは四つ目のモーラが高ピッチで発音されるのであるから、窪蘭の規則が適用されている。

語末から2番目の音節が軽音節の場合には、その前の音節、つまり後ろから3番目の音節にアクセント核が付く。次の(30)の例にもみられるように、アクセント核の付与された音節が二つのモーラから成り立つ重音節であれば、前のモーラのみ高いピッチで発音される。本稿でのアクセントという用語は、音節に付与される抽象的なアクセント核であり、実際に発音されるピッチと区別して用いられている。次の太字の「音節」は、アクセント核が付与されている音節を意味する。

(30) 音節 - 軽音節 - 音節

イン¹タビ²ユー、イン¹ディ²アン、イン¹デ²ックス、ウエ¹スタン、
 エン¹ジニア、オーソ¹ドックス、キャ¹プテン、キャ¹ラ²クター、
 キャ¹ラバン、クライ¹マックス、コメ¹ディアン、ジャ¹ーナ²リスト、
 タ¹ンバリン、トラ¹イ²アングル、ホ¹テル、ボ¹ラン²ティア、ス¹リラー

「インタビュー」や「インディアン」や「キャプテン」などは、窪蘭のアクセント規則が適用されない。これらの語は英語の強勢と同じ位置に高いピッチが来る語であるが、本稿では英語のアクセントに従ったと考える前に、外来語のアクセント規則の適用を優先的に考えることにする。

6.2. 撥 音

撥音を尾子音に持つ VN の音節は、二つのモーラから成り立っている重音節ではあるが、高ピッチに発音される母音は、語尾からのモーラ数によって決められる。次の語は、撥音の次に 2 モーラの重音節があるものである。

(31) VN - 重音節

アチ¹ウン²サー、カ¹レン²ダー、スボ¹ン²サー、バト¹ミ²ントン、
 ヘル¹スセ²ンター

VN 音節の次に 1 モーラの軽音節が来る場合には、アクセントは VN の前の音節に付与される。

(32) 音節 - VN - 軽音節

シヨ¹ッピン²グ、セ¹カンド、ド¹レ²ッシン³グ、パー¹キン²グ、パ¹テント、
 プレ¹ゼント、ペ¹パー²ミント、ペ¹ンダント、マー¹ゲティン²グ、
 ラ¹ンキン²グ

(31) と (32) の例から、高ピッチが後ろから四つ目のモーラに付いているのが分かる。「シヨッピング」や「パーキング」のように、後ろから四つ目のモーラが重音節であれば、その前の語頭のモーラが高ピッチに発音される。

上の (31) と (32) の語では、VN 音節は、重音節とか軽音節とかの概念に関係なく 2 モーラとして数えられた。しかし、VN 音節の中には、長母音や二重母音と同じく、アクセント核の付与される重母音とみなされるものがある。

(33) VN - 軽音節 #

ジレンマ、タイヤモンド、パーマネント、プロバガンダ、
ブロンズ (ブロンズもあり)、マリンバ

撥音を含む音節が超重音節 /VVN/ である場合には、語末の音節であってもアクセントが付与される。次のように、高ピッチになるのは音節の最初の母音のみである。

(34) VN / VVN #

スペイン、ハリケン、プレイン、リターン

(31), (33), (34) の高ピッチの位置は後ろから三つ目のモーラであり、(28), (29), (30) と同じ位置が高ピッチに発音されている。次の拗音と撥音を含む重音節を語末に取る語も、語末から三つ目のモーラが高く発音され、窪菌のアクセント規則が適用されている。

(35) V(C) - CjVN #

アドミッション、エクステンション、テクニシヤン、テレビジョン、
 ミュージシヤン、パーカッション

筆者は、拗音の前にアクセントが付与されるのを次のように考える。拗音の *kya, kyu, kyo* は、その基底形が *kia, kiu, kio* であり、2 音節の単音節化したものとする。仮に「ム-キ-アン」という 3 音節の外来語があったとしよう。後ろから 2 音節の「キ」が軽音節なので、「ム」にアクセントが付き、「ムキアン」と発音されるであろう。「キア」が拗音に発音されて「ムキャン」になったものであり、アクセントの位置は変わっていない。このように考えると、英語のアクセントとの関連が思い出されるであろう。次の英語の強勢の位置は、後ろから 2 番目の音節にあり、(35) と同じである。

- (36) *expression* /iksprɛʃən/, *musician* /mju:zɪʃən/,
petition /pətiʃən/, *religion* /rɪlɪdʒən/

英語の名詞の強勢規則は、語末から 2 番目の音節が軽音節であれば、その前の音節、つまり語末から 3 番目の音節に強勢が付くはずである。所が (36) の英語は語末から 2 番目の音節に強勢が付いている。しかしその綴り字を見ると、語末から 3 番目の母音に強勢が付いていることになる。英語の /Ci/ が口蓋子音になる現象は、日本語の拗音と同じである。

6.3. 促 音

撥音を尾子音とする音節は、モーラ数によって軽音節とも重音節とも取られることを見てきたが、同じように子音を尾子音に取る促音の音節はどうであろうか。促音を尾子音とする VQ 音節は、次のように重音節とみなされ、アクセント核が付与されている。

- (37) **VQ - 音節 #**
 ア^クタ^クカー、オリ^ンピ^クック、クラ^クッカー、サー^モス^タット、
 ス^テッ^ク、ス^ナッ^ク、ハン^ディ^クャッ^ク、ピ^ラミ^ッド、
 ボ^イコ^ット、ボ^ケッ^ト、マ^スコ^ット

(37) の語は、窪蘭のアクセント規則によると、語末から三つ目のモーラを含む音節にアクセント核が付与されている。

重音節の中でも、アクセントを引き付ける度合いに差があるようである。長母音・二重母音に最もアクセント核が付与されやすく、次に促音、撥音の順序であろう。促音の音節よりは長母音の音節にアクセント核が付きやすいことから、次の例にみられるように、促音音節のアクセント核がその前の長母音に移動している。

(38) $\overline{\text{V}} - \text{VQ}$

カーベツツ、サーキツツ、チューリップ (チューリップもあり),
フォーマツツ、マーケツツ、ミュージック

makeup は「メーキャップ」と発音されるが例外的である。Percussion は「パーガッショツツ」と発音され、「パーカッショツツ」とは発音されない。これは (35) の例のように、撥音の「ショツツ」が続いているので、長母音へのアクセント移動は行なわれない。(38) の語も後ろから四つ目のモーラにアクセント核が付与され、その音節が重音節なので前のモーラ、つまり語末から五つ目のモーラが高ピッチに発音されている。

6.3. 挿入母音語のアクセント

英語の子音連続語が日本語に借用される際には、日本語の音節体系に合わせて母音を挿入するのであるが、その挿入された母音がアクセント核の付与される位置にありながら、アクセントの付かない場合がある。例えば、merry は、語末から2番目の音節、あるいは3番目のモーラを含む音節にアクセント核が付与され「メリー」と発音されるが、tree は /tr/ の子音連続があるので「ツリー」とは発音されずに、「ツリー」と最後の音節にアクセント核が付与されている。

(39) 挿入母音の低ピッチ

- a. /VV/#: crew /kru:/ → ク^ールー, ski /ski:/ → ス^{キー},
 star /stɑr/ → ス^{ター}, slow /slou/ → ス^{ロー},
 try /traɪ/ → ト^{ライ}, dray /draɪ/ → ド^{ライ},
 free /fri:/ → フ^{リー}, play /pleɪ/ → プ^{レイ}
- b. /Vər/#: store /stɔər/ → ス^{トア}, spare /spɛər/ → ス^{ペア}
- c. /Vn/#: skin /skɪn/ → ス^{キン}, spin /spɪn/ → ス^{ピン},
 prin /prɪn/ → プ^{リン} (ア^{リン}もあり)

(39b) の英語は語尾が /ər/ と発音されるので, color /kʌlər/ が「カラー」と長母音で発音されるように, 「ストアー」, 「スペアー」と発音されても良いようであるが, 3 母音が連続するので短母音に発音される。英語の強勢のないあいまい母音の /ər/ は, 借用語でもアクセント核の付与されることはない。子音間の挿入母音でも, plan /plæn/ 「^アプラン」のようにアクセント核の付くものがある。(39) の例は, 英語が /CCVV/, /CCVər/, /CCVn/ の音節構造である借用語は, 語末の音節が重音節であるので, 語末から 2 番目のモーラが高ピッチに発音されるというものである。一方, 語末とその前の音節が軽音節の借用語は, 次のように後ろから 3 番目の音節の挿入された母音にアクセントが付与される。

(40) 挿入母音にアクセント核

- /CVC/#: グ^{ラス} (class), グ^{ラス} (glass), グ^{ラフ} (graph),
 ク^{ラブ} (club), グ^{ラブ} (glove), ス^{ラム} (slum),
 ス^{リム} (slim), ス^{リル} (thrill), ド^{ラム} (drum),
 プ^{ラム} (plum)

日本語のアクセントのない「イ」と「ウ」は, 一般的に無声子音間では無聲音に発音される。例えば「きつつき」は /kʲitsʲutsʲuki/ と発音され, 「地下室」は /t͡ɕikáɰʲitsu/ と発音される。高母音 /i/ と /u/ が無声母音で

ある。更にまた、「三菱」は /mitsúbiji/ と発音されるが、「三越」が /mitsukóji/ と高ピッチの位置が右の母音にずれるのは、無声母音を高ピッチで発音するのが難しいからである。同じような現象が外来語のアクセントにもみられる。次の発音は、アクセント核になるはずの高母音が無声子音間で無声音になるため、アクセントの位置が左へ1音節ずれたものである。下線 が無声母音である。

(41) 無声母音のアクセント移動

アクシヨン → アクシヨン, アクセント → アクセント,
 クリスタル → クリスタル, クリスチャン → クリスチャン,
 コレクシヨン → コレクシヨン, パスカル → パスカル,
 フィクシヨン → フィクシヨン, ボクシング → ボクシング,
 レセプシヨン → レセプシヨン

(41) の外来語のアクセントが英語と同じになるのは、英語では子音群の前の母音にアクセントが付くからである。(41) の例のように、英語の子音群に挿入した借用語の「ウ」は、実際にははっきりと発音されていないので、外来語に子音群の前の母音にアクセントを付与する規則があると考えられることもできよう。しかし、それでは日本語の音節構造を無視することになる。

6.5. その他のアクセント

音節の種類やモーラ数だけでは外来語のアクセント位置が決められない語も多くある。第一に平板型のアクセントを持つ語が挙げられる。

(42) 平板型アクセント語

アメリカ, アリバイ, アルカリ, アルコール, イタリア, イベント,
 エナメル, オルガン, カシミア, ガソリン, カタログ, カトレア,

キャラメル, ギロチン, サッカリン, サドル, ジュラルミン,
 ジョギング, スタジオ, スライド, スライディング, ネーミング,
 バイパス, ピアノ, ブレンド, ヘディング, ボーリング, ボール,
 ミーティング, ミニチュア, ランニング

外来語を短縮した4モーラ語は平板型が多い。

(43) 4モーラ短縮語

イラスト (illustration), インテリ (intelligent), イントロ
 (introduction), インフレ (inflation), エフエム (FM, frequency
 modulation), エンスト (engine stop), オフレコ (off-the-record),
 コンクリ (concrete), シーエム (CM, commercial message),
 ノンプロ (non-professional), ノンポリ (non-political), ジーパン
 (jeans pants), パソコン (personal computer), バーテン (bartender),
 ハンカチ (ハンカチもあり) (handkerchief), ミスプリ (misprint),
 モノクロ (monochrome), リハビリ (rehabilitation), リモコン
 (remote control)

4モーラ短縮語でも起伏型を取るものに、「アパート」(apartment),
 「アレンジ」(arrangement), 「アクセル」(acceleration) 等がある。

4モーラ短縮語は平板型が多いのであるが, 3モーラ語になると平板
 型より起伏型が多くなり, 2モーラ語になると起伏型になる。

(44) 3モーラ短縮語

- a. 平板型: アニメ (animation), アルミ (aluminum), ダイヤ
 (ダイヤモンドもあり) (diamond), デフレ (deflation), パンク
 (puncture)
- b. 起伏型: コンビ (combination), コンパ (company), コンペ
 (competition), センチ (centimeter), テレビ (television),

トイレ (toilet), パーマ (permanent), ポリス (policeman),
マイク (microphone), ロース (roast)

(45) 2 モーラ短縮語

アジ (agitation), アマ (amateur), エゴ (egoism), エロ (erotic),
コネ (connection), スト (ストもあり) (strike), ゼミ (seminar),
デマ (demagogy), デモ (demonstration), テロ (terrorism), ドル
(dollar), ネガ (negative), ビル (building), プロ (professional),
ミリ (millimeter), メモ (memorandum), ラボ (laboratory),
レジ (cash register), ロケ (location)

これまで述べてきたアクセント規則では説明できない語が次のようにある。

(46) コンサート (cóncert), ハプニング (háppening), パラダイス
(バラダイスもあり) (páradise), ビジネス (búsiness), フェス
ティバル (féstival), ミレニウム (millénnium), メッセージ
(mésage)

(46) の語のアクセントに関しては、英語のアクセントの位置をそのまま借用語のアクセント位置にしたと考える。だからと言って、英語の強勢規則が借用語に適用されているとは考えられない。

窪蘭のアクセント規則は、語末から3番目のモーラを含む音節にアクセント核を付与するものであるが、それは筆者が述べている語末から2番目の重音節に付与されるか、語末から2番目の音節が軽音節ならば、その前の音節に付与するものと同じである。英語の名詞の強勢については、小林 (1996: 77) が述べているように、語末の音節が短母音である場合、語末から2番目の音節が重音節であればそこに強勢が付き (aróma, aréna, coróna, horíson, Minnesóta), 語末から2番目の音節が軽音節であれば、その前の語末から3番目の音節に強勢が付く (América, aspáragus,

asterisk, interest, metrópolis) が、これは借用語のアクセント規則と似ている。窪蘭と筆者との違いは、日英語の音節を数えるかモーラを数えるかにある。

参 考 文 献

- Chomsky, Noam and Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. Harper and Row.
- 城生伯太郎. 1998. 『日本語音声科学』株式会社バンダイ.
- 小林泰秀. 1992. 「英語借用語に見られる子音重複」『広島女学院大学英語英米文学研究』創刊号. 97-114.
- 小林泰秀. 1996. 『英語強勢論』京都修学社.
- 窪蘭晴夫. 1995. 『語形成と音韻構造』くろしお出版.
- NHK 編. 1995. 『日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会.
- Prince, S. Alan. 1984. Phonology with Tiers. In *Language Sound Structure*, ed. M. Aronoff and R. Oehrle. MIT. 234-244. Also in *Phonological Theory: The Essential Readings*, ed. John A. Goldsmith. Blackwell. 1999. 303-312.
- 徳永志保. 2000. 「外来語の研究——語形とアクセントのズレ——」『英文学会々報』No. 44. 広島女学院大学英文学会. 89-103.